

NEWS RRM

[ニューズ] Regional Resource Management



Information

平成29年度のオープンキャンパス

Information 01

大学院の受験を具体的に考えている方、興味がおありの方へ。
オープンキャンパスでは、大学院や入学試験の概要を紹介し、施設・展示のご案内をいたします。

具体的な研究テーマや学習についての相談も可能です。

また、オープンキャンパスを含む前6日間、個別面談を毎日受け入れます。随時受付しておりますので、希望日時と話を聞きたい教員をお知らせください。

●オープンキャンパス

春のオープンキャンパス	夏のオープンキャンパス	夏休みオープンキャンパス	冬のオープンキャンパス
5月7日(日)	7月2日(日)	8月6日(日)	12月24日(日)
個別面談 5/2(火)～5/7(日)	個別面談 6/27(火)～7/2(日)	個別面談 8/1(火)～8/6(日)	個別面談 12/19(火)～12/24(日)

平成30年度入学生募集

Information 02

●博士前期課程(A日程、B日程、C日程)・博士後期課程(第1回、第2回)
博士前期課程(全日程を合わせて定員12名)、博士後期課程(全日程を合わせて定員2名)の入学試験を下記の予定で実施いたします。
試験は、専門試験(小論文)と口述試験、会場は豊岡ジオ・コウノトリキャンパス(豊岡会場)と、神戸商科キャンパス(神戸会場)から選べます。

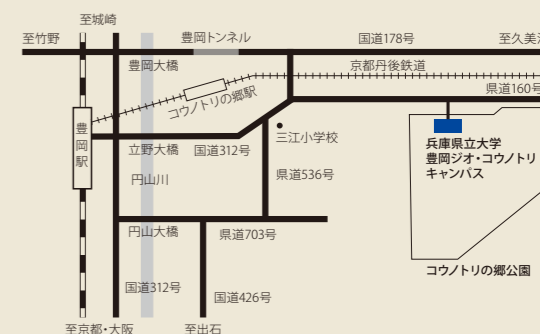
	A日程・第1回	B日程	C日程・第2回
入試日	平成29年 8月26日(土)	平成29年 12月17日(日)	平成30年 3月4日(日)
願書受付	平成29年 8月2日(水) ～8月15日(火)	平成29年 11月21日(火) ～12月5日(火)	平成30年 2月7日(水) ～2月20日(火)
	※事前に受験資格審査が必要な場合は、平成29年7月16日(日)～7月30日(日)に審査書類をご提出ください。	※事前に受験資格審査が必要な場合は、平成29年11月4日(土)～11月17日(金)に審査書類をご提出ください。	※事前に受験資格審査が必要な場合は、平成30年1月21日(日)～2月3日(土)に審査書類をご提出ください。

[お問い合わせ] 各催しの詳細はウェブサイトをご覧ください。あるいはメール、電話にてお気軽にお問い合わせください。



兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 RRM

〒668-0814 豊岡市祥雲寺128(兵庫県立コウノトリの郷公園内)
兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス
Tel. 0796-34-6079 Fax. 0796-22-5200
E-mail: u_hyogo_toyooka@ofc.u-hyogo.ac.jp
<http://www.u-hyogo.ac.jp/rrm>



写真提供: 松原 典孝(来日岳からの眺望)
川崎 由美子(棚田)
金剛寺・山本農地水保全協議会(草刈り作業)
山本 大寛(サイエンスカフェ)

清明のころ

教授 井口 博夫

二十四節気の一つ「清明」のころ、修了生を送って、新入生をむかえ、新たな一年が始まった。毎年毎年、春が来て、夏、秋、冬が過ぎれば学生を送った分だけ、新たな新入生をむかえる。地域資源マネジメント研究科は四回目の新入生をむかえた。

大学に勤めだした頃、学生は少し年下の後輩であった。学生の年代はいつも同じで、自分が年を取っていく実感はなく、ある時何とも言えない学生との距離を感じた。ふと、学生から見ると、親の世代とは言わないまでも、先輩とは思えない年に自分になつていくことに気がつく。自分は外観も中身も徐々に変化しているが、意識しないと気付きにくい。

山の木々が新緑になると、新しい一年の始まりを感じる。木は少しずつ成長し、多くの草は毎年同じように生えてくる。よく考えれば去年の草とは違う草が生えているのだが、同じ草が生えているように見える。山を見ると木々も草も去年と同じように見える。毎年春になると、いつもの春の山に見える。夏の山、秋の山、冬の山も、毎年毎年同じように見える。何百年か後に見ても同じであろうか。何百年前も同じように見えたであろうか。おそらくかなり違って見えるのではないだろうか。毎年の繰り返しの中で気づきにくい変化も年月がたてば確実に変化しているのだから、草は毎年入れ替わり、木々は少しずつ成長し、やがて入れ替わる。山の形でさえ、何千年、

何万年の年月の中で変化していく。少しずつ削られたり、少しずつ隆起したり、時には断層運動のようにほぼ瞬間的な変化もありながら確実に変化していくのである。私たちが今見ている風景は、今の瞬間の風景である。

昨年度の修了生の残した研究成果は、その前の第一期生よりも確実に進歩した。一期生がサボったわけでも、能力がなかったわけでもない。私たち教員の指導が少しくまっていた分を越えて昨年度の修了生は進歩したのである。人間社会もこのようにして進歩してきたに違いない。人が入れ替わり先人の知恵を少しずつ変えながら、それがまた後の人にとっての先人の知恵となつて。大地も人間以外の生物も、人間が意識してもしなくても変化している。しかし、人間は変化を「意識」することで、社会を変化というより進歩につなげてきたのではないか。

地域資源マネジメント研究科は、地域資源マネジメントを意識することで、確実に進歩していく。そして、その進歩が、地域を確実に前に進めていく。修了生を送り出して新入生をむかえ、先の大きな変化がいま確実に始まっているのを感じる。学生が毎年入れ替わり、数十年の時間がたてばスタッフも入れ替わる。いつものように一年が過ぎ、研究科は同じことを繰り返すのではなく前に進む。新緑を感じながら、新たな前進へと気分が高まる季節をむかえた。

地域資源マネジメント研究科第二期生の研究成果

地域資源マネジメント研究科は、本年3月に修士課程修了生、7名を送り出しました。本号では、第二期生2名(ソシオ分野)の研究成果の一端を紹介いたします。

農村地域における女性の地域参画の推進に向けて

川崎 由美子 (養父市役所秘書課)

農村地域では、古くから存在する男性優位の慣習や制度によって、さまざまな場面において男女の非対称な関係が未だに見受けられます。特に地域の自治運営については、男性中心で行われる傾向が根強く残っています。それでは、農村地域において、女性が地域の自治運営に参画(以下、地域参画)していくことはいかにして可能なのでしょうか。そこで、近年全国各地で設立されている地域自治組織に注目し、事例研究を通して女性の地域参画の推進の可能性について検討を行いました。

事例として取り上げた兵庫県養父市「出合校区協議会」は、養父市の地域自治組織の中で唯一となる女性部会を設置し、女性が主体となった活発な活動を展開しています。そこで、女性部会の設立過程や活動について調査を実施した結果、まず女性部会の設立にあたって、女性たちが活動に参加しやすくなるための協議会側の組織づくりの工夫が三点確認されました。第一に、女性部会に対し「正当性」を付与すること、第

二に、正当性を持続させるための手法をとること、第三に、ボランティアというゆるやかなしくみを採用すること、です。次に、女性部会の活動にあたって、女性部会側の組織運営の工夫が二点確認されました。第一に、各集落からボランティアを集めること、第二に、「いえ」の行事を「校区」の行事として行うこと、です。このように、協議会側も女性部会側も工夫を凝らしながら女性たちが参加しやすい組織づくりを行っていることが確認されました。



別宮の棚田(出合校区内)

集落連携による地域コミュニティづくりの可能性

小田垣 聡 (豊岡市役所コミュニティ政策課)

近年、わが国の農村地域において、人口減少、高齢化、混住化による価値観の多様化等、農村社会の変容により、単一集落自治に限界が見られ、集落の枠を超えた小学校区単位などの広域的な地域コミュニティづくりが注目されています。

単一集落自治の限界は、例えば全国的に見られる耕作放棄地の増加、管理が行き届かない水路の機能不全、手入れがされなくなった里山の風景等、生活環境保全に関わる様々な問題として表出しています。しかしながら、生活環境保全に関わる農村資源は、集落規範や管理方法が異なることから広域的な地域コミュニティでは恒常的な対応が馴染まない場合も考えられ、これまで単一集落が担ってきた保全管理を補完していくことが困難な場合もあります。このように、生活環境保全は単一集落で取り組むことは難しくなってきたものの、かと言って広域的な地域コミュニティで対応するには馴染まないという状況が浮かび上がってきます。

この状況に対して、農村資源と人びとの関わりを踏まえ、近接する集落同士が連携した生活環境保全の取組みについて考察しました。本研究で取り上げた生活環境保全に関わる集落連携の事例から、①集落に関わる境界意識の薄れ、②公平性を意識した管理の組み替え、③活動余力が生まれる、という効果がうかがえました。そして、この3つの効果が見られた集落連携における構成員の関係性は、管理主体や管理のあり方について、あいまいさを持ち合わせながらも、互い



地域ぐるみによる河川の草刈り作業

がそれを引き受け合い、その時々で構成員が生活環境保全に取り組みました。これを本研究では、不完全さを引き受け合う関係性」と捉え、生活環境保全に関わる集落連携の特質と考えました。また、この集落連携の特質を生み出す基盤は、構成員同士が観察し合い、互いを理解し合う状況からなる、構成員間の「観察し合う関係性」が大きくはたらいたと考えました。本研究で見られた生活環境保全に関わる集落連携は、連携による革新的な取組みや、集落合併のような斬新な組織体制の組み替えでもなく、構成員同士が資源との関わりを理解し合い、不完全な状態を納得し合う関係性でした。このような姿は、将来にわたって構成員が集落で暮らすため、持続的な単一集落自治に向けての近接集落との関係づくりと考えることができました。そして、生活の営みから生まれた集落自治や、そこに関わる構成員の姿を理解しておくことは、今後の農村地域における地域コミュニティづくりにおいて、ますます重要となると考えます。

第3回サイエンスカフェRRMの記

教授 中井淳史

現代に生きる私たちの多くは、自然は大事であり、実際にどこまで実践できているかは別として、自然保護とは善いことであると考える人も、自然保護とは悪いことであると考える人も、同時に、現代人としての私たちの生活には、多かれ少なかれ自然の破壊をもたらす部分があることも知っています。自然保護が善であるならば、私たちは現在の生活スタイルをすべて捨てて、いわば原始時代の生活に回帰すべきなのでしょう。現代社会のあちこちであふれている「自然保護」や「共生」といった言葉ですが、立ち止まって考えてみると、さまざまなジレンマを抱えていることに気づきます。自然の何を、どこまで、何のために守ればよいのか。第3回のサイエンスカフェRRMは、これまでとは少々趣をかえて、「自然保護の倫理のジレンマ」というテーマを設定しました。話題提供者は現代ヨーロッパの宗教学・倫理思想を専門とする佐藤啓介氏(南山大学人文学部准教授。佐藤氏からは、まず、自然環境が人間にとって役立つから守られるべきだという人間中心主義の主張と、自然そのものに内在的価値があるからこそ守られなければならないとする非人間中心主義の主張とい

う環境倫理の二つの主要な考え方を整理していただいたうえで、近年のトピックについて解説いただきました。人間の利益にかなうか否かを徹底的に追求する立場や、自己意識の有無を手がかりに区分して段階的に考えようとする立場、自然のあらゆる存在者が抱える目的の実現を重視する立場など、とりあげられたトピックは多岐にわたりました。答えが容易に出るどころか、おそらく永遠に決着のつかない課題であるからこそ、個々の意見の立場や根拠をきちんと掘り下げて明確化することが、開かれた議論へつなぐためにも重要と思われる。

意見交換では、大学院生(郡山鈴夏さん、古城夏海さん)をコーディネータに、①人間と動物の共生、②自然景観の人為的保護、の二つの具体的なテーマについてディスカッションをおこないました。自然環境と人間の関係は決して静的なものではなく、日々変化します。過疎化や山林利用の変化を受けて問題化している獣害や、ジオパークのような自然景観の管理保護といった、但馬地域でも身近な話題がとりあげられました。それだけに参加者の



講師による話題提供



グループディスカッション